

プロローグ

今、俺の横で姉貴が素っ裸で寝息を立てている。この姉貴は血の繋がった真正正銘の俺の姉貴だ。つい姉貴と近親相姦してしまったのには少々複雑な事情がある。

それは数時間前に遡る――。

俺は岸本拓也、二十四歳。フリーターで生計を立てている。家賃四万円のアパートに一人暮らした。

俺には誰にも言えない秘密があった。それは人知れず女装をすることだ

った。部屋には小さなクローゼット(と言うより申し訳程度の押入れだが)があるが、その中には女装道具一式が所狭しと押し込まれている。

レディースの服や、靴、ウィッグ、アクセサリーなど。メンズの服よりも多いぐらいだ。それを着て、メイクをして女の子になるのが唯一の楽しみだった。時々外に出るが、ほとんどが室内女装だ。

今日も定時にバイトを終えて、部屋に帰り、コンビニで買ってきた弁当を平らげて、夜のリラックスタイムを過ごしていた。音がないと寂しいので、いつもテレビをつけている。

それはバラエティー番組を見ているときに起こった――。

テレビを見ながら、ゲラゲラと笑っていると、テーブルの上のスマホが音を立てた。

「ん？」

LINEのメッセージだ。誰だ？

友達でないことは確かだった。送り主は「神」になっている。

神？ 神様？

俺はとりあえずその「神」という奴から来たメッセージを読んでみた。どうせ誰かのいたずらだろう。そこにはこう書かれていた。

「お前の願い事を一つだけ叶えてやろう。さあ、願い事を言え」

神？ のメッセージだ。

俺は鼻で笑った。誰のいたずらだ？ タケか？ それともチャンコか？ あいつらならやりそうだ。どっちでもいいが、今はそんな気分ではない。相手にするのも面倒なので放っておくことにした。

番組がコマーシャルに入ったとき、再びスマホが鳴った。手に取って見てみると、また「神」だった。なんだよ、まだやってんのか？

「願い事はなんだ？」

まただ。何のことだ。ちよつとしつこい。

誰のいたずらかは知らないが、何か反応しないと終わらないみたいだ。俺は友達のいたずらだと思って、ちよつとからかってやることにした。

「女になりたい」

そう文字を打って送信ボタンをタップした。俺は可笑しくてクスクスと笑った。相手の反応を思い浮かべると笑えてくる。今ごろ「どう返そうか」と思っているに違いない。

すると「わかった」と、神は返信を寄越した。

まだ「神」なんて言ってるのか。どうせタケかチャンコだろ。あいつら……。

だが、しばらく神からの返信はなかった。やっぱりいたずらだったみた

いだ。俺は畳に寝そべって、またテレビに目を向けた。